



男女共同参画推進には、働き方改革が不可欠の前提となると考えていました。そのなかで、新型コロナウイルス感染症への対応として生活様式を「新しい」ものにすることが求められ、また、在宅での業務執行が働き方の一部として不可避のものとなった時、私たちの取り組みにどのような視線が欠けているのか、気づかせていただければと思います。今回、このテーマで自由に、それぞれの「生活様式」を記していただきました。学内でも、また在宅でも、諸種の課題があることは承知しているつもりですが、みなさまの声を聞かせていただいて、本部としても可能な限り取り組もうと思います。

男女共同参画推進本部長 中島裕昭

《テーマ》 コロナ禍における男女共同参画、遠隔労働、在宅勤務について

附属小金井小学校 教諭 大村 幸子

コロナ禍による緊急事態宣言が発令された4月7日現在の我が家の状況です。

夫：外資系IT企業勤務、3月より在宅勤務。9時～18時までパソコンを起動させ、Teamsで連絡がとれる状態にしておく必要あり。会議も頻繁に行われる。
私：今年4月、附属小金井小に着任、始業式の後、休校となる。Teamsによるオンライン学習支援を行うこととなる。在宅勤務が推奨される。
娘：進級して年少クラスがスタートするも登園自粛要請により自宅待機となる。

こうして4月2週目より保育を伴う在宅勤務が始まりました。午前中は、夫が娘のお世話を担当し、私はオンラインでの学習支援、書類作成、会議、大学院のレポート作成。午後は交代、私が娘のお世話担当になり、エネルギーの有り余っている娘を公園へ連れていきます。散歩中、Teamsへの投稿や連絡もあるので、スマートフォンのチェックも欠かせません。散歩から帰ってきて、娘が昼寝をしている間に、返信を行います。昼寝明けの娘はご機嫌斜め、一生懸命に相手をしているうちに、あっという間に、夕方に。終わらなかった仕事や勉強は明日の早朝にと思いつつ、一日が終わってしまいました。

日中は育児と仕事の両立に悪戦苦闘、仕事に集中できるのは娘が寝ている早朝という過酷な状況でしたが、それでも、私は、つぶれることなく、育児と仕事の両方に精一杯向き合うことができました。母親として、教員として、大学院生として、自分がやりたいことすべてに自分らしく挑戦することができました。

それは、家族と職場の協力や連携、支えがあったからこそだと思っています。手一杯のときには夫が家事や育児を肩代わりしてくれました。新しい職場、オンラインでの学習支援、困っているときにはすぐに先生方が教えてくださいました。温かいお言葉もたくさんいただきました。この「一人ではない」という実感がワークライフバランスには重要であると感じています。家族、職場、組織や制度に支えられている、「一人ではない」と思えることに感謝しながら、楽しく元気に育児と仕事を充実させていきたいと思っています。

芸術・スポーツ科学系 特任講師 中村 ひの

「ケーススタディ未満；コロナ対応」

出産後、我に返ると3月も終わろうとしていた。世の中は新型コロナですっかり様相が変わっていた。4月7日には緊急事態宣言が出た。

——さて、困った。

もちろん子育てがある。新生児はなんでこんなにフニャフニャなのだろうか。それもそうだが学校のことだ。令和二年度から学芸大の特任講師に着任して、春季に担当授業が早速入っている。

産後の急激なホルモンバランスの変化で、私はすっかり不安への耐性が低くなっていた。見通しのつかないことが恐ろしくてたまらない。眠ると汗びっしょりで目が覚め、強い絶望感が襲う。1か月検診で産後うつに片足をかけていると判断されて、問診を受けることになった。うつ状態のせいかわかりませんが、助産師さんは新生児のことを色々聞いてくれるものの、私が学校の不安ばかり話すので妙な顔をしていた。



中村先生のご自宅

結局、学校は5月上旬から遠隔で始まることになった。遠隔とは遠隔授業の事だというのが、それはいったい何なのだ。頭を抱えてさらに乳児も抱え、家じゅうをウロウロした。外出自粛で散歩するのは室内だった。産後うつステージにいよいよ両足を乗せる気がした。

しかし非常勤講師で行っている他校の先生に、奇特な方がいた。オンラインツールの実地講習を開いてくれるという。抱えていた乳児を背後のハイローチェアに入れて、パソコンに飛びついて参加した。

突貫工事ではあるが、おかげで私の遠隔授業はスタートした。乳児は相変わらずハイローチェアにいた。その頃の録画を見返すと画面に向かう私の背後、もぞもぞ動き声をあげる様子が見切れている。ひや汗をかいた（臭いがオンライン配信されなくてつくづくよかったと思う）ことは何回かあったが、気づくと春季は終わっていた。乳児は保育園に通い始め、ハイローチェアは空になっていた。画面に映る所以外、部屋は荒れ果てていた。

この経験はケーススタディにはどうにもお粗末だと自覚している。しかし、働きながらの出産や育児の何が正解なのか、どうすればうまくいくのか、ノウハウを見出すためのデータ蓄積はまだ絶対的に足りないと思う。「出産と講師着任が重なったところにコロナ禍が来た」というのは特殊な例かもしれないが、だからこその記録として残しておけば、役に立つこともあると願いたい。

——これを書いている私の背後には今でも空のハイローチェアがある。そして部屋は荒れ果てている。

学務部大学院課教職大学院係主任 井上 美麻

いただいたテーマを自由に書いてよい、というお話をいただきました。お目汚しかと思いますが、ご覧いただけたら幸いです。

コロナ禍、というと皆さんが大変だったのは4～5月の緊急事態宣言中ではないでしょうか。我が家は5月を予定していた私の育児休業からの復帰を6月に変更したため、宣言中は比較的負担感なく過ごしておりました。「男女共同参画」な家庭であったか、という私（妻）が家に居る時間が長く、家事分担が全員平等ともいいきませんでした。小4の息子ができることも増えたこともあり、できることをできる人が行っていました。

我が家でのコロナ禍における…を語れるのは宣言が解除になり、私も仕事に復帰し、学校や保育園が始まった6月からかと思えます。復帰早々1歳児が元気に？高熱を出し、解熱後5日間は本人も年中の兄も登園禁止という事態になりました（後日突発性発疹の診断）。コロナ禍でなければ元気な子は登園できるはずなのに…。解熱後の1歳児とそもそも元気な年中児の面倒をみるため、在宅勤務予定だった夫に休暇に切り替えてもらって私は出勤したり、午前午後で交代して出勤したり、ということで何とか乗り越えました。夫の部署の方には急な休暇でご迷惑をおかけしましたが、在宅勤務予定だったので、快く受入れていただけたのかもしれないと感じています。

業務内容的に私は在宅勤務を1回行ったのみですので、「在宅勤務」について多くは語れません。しかし、週に数回在宅勤務で夫が家に居て、始業前までに朝の家事を片付けてもらい、終業後に夕方の家事を進めておいてもらえるという点で、夫が在宅勤務で妻が出勤、というのも「共同参画」一つのチャンスを生んだのかなと感じています。

と、夫の在宅勤務のありがたさを語っていたら、10月からは夫の在宅勤務がなくなるとのこと。我が家の「コロナ禍における男女共同参画」について考えるべきはこれからかもしれません。



お兄ちゃん（小4）の子守り

貴重な原稿をありがとうございました！

次のような支援があります。皆様、どうぞご活用ください。

・ベビーシッター割引券・病後児保育利用補助制度・学会参加時の託児利用補助制度
また、育児・介護・看護等支援補助員制度もあります。1月に募集を開始します。
詳細や利用については下記までご連絡ください。



東京学芸大学 男女共同参画推進本部

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

TEL: 042-329-7894 (事務局: 本部棟4階人事課職員係)

E-mail: shien1@u-gakugei.ac.jp URL: <http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/>